

美馬市木屋平の民家

民家班（日本建築学会四国支部徳島支所）

井河 明子*¹ 植村 成樹*² 喜多 順三*³ 高田 哲生*⁴ 田處 博昭*⁵ 田村 栄二*⁶
 中道 亮太*⁷ 那須 幸男*⁸ 根岸 徳美*² 林 茂樹*⁹ 姫野 信明*¹⁰ 廣田 和正*¹¹
 福田 頼人*¹²

要旨：美馬市木屋平の茅葺き民家を対象に悉皆的調査を行い、総数で168棟を確認した。その中で特に重要と思われるもの8棟について詳細な調査を行った。詳細調査では江戸中期から大正期の民家を調査することができ、時代の変遷による間取や構法などをある程度明らかにすることができた。その中で櫟木の民家には、貞享元年（1684）の棟札を持つものがあり、これは現在までの調査で確認されている現存する民家としては、国指定重要文化財である美馬市木屋平の三木家住宅、佐那河内村の安芸家住宅に次いで県下で3番目に古い民家と考えられる。

キーワード：茅葺き民家、サブロク、中ネマ三間取、五尺間、コッコミ（コキ柱・オトシコミ構法）

1. はじめに

美馬市木屋平は徳島県のほぼ中央に位置し、穴吹川の中・上流域とその支流沿いに広がっている。その地形は村史によると「大北から下流域は川岸が切り立った岩壁と急斜面が連続するいわゆるV字谷となっており、集落は山の肩より上方の緩斜面に開けている。檜原、貢、南張などの集落はその典型である。また、川井から上流域は川の浸食の度合いが浅く川岸近くから緩斜面が広がり、小規模であるが平坦な段丘も点在し集落も川岸近くに集中している。川井、八幡、谷口、竹尾、下名、森遠、川上などの集落がその典型である。」とある。このような立地の木屋平にはどのような民家が存在し、どのような生活が営まれてきたのだろうか。

木屋平民家について、徳島県民家緊急研究報告『阿波の民家』においては国指定重要文化財となっている三木家住宅を含め6棟を記録している。

2. 調査目的

木屋平の民家がどのような特徴を持っているのか、そしてその規模や間取・構法などがどのように変遷してきたのかを明らかにするために調査を行った。

3. 調査対象

その地域の気候風土に合わせた特徴を色濃く持つ伝統的な建築物である茅葺き民家を調査対象とした。

なお、茅葺き屋根を降ろし、小屋下げ¹⁾しているものは外観だけでは判断しにくいため基本的に調査対象から外しているが、聞き取りなどにより、明らかに以前は茅葺きであったと確認できたものについては調査対象としている。また、調査日程の都合もあり、先行調査が行われている三木家住宅については見学させていただくにとどめた。

4. 調査方法

まず、一次調査として、村内全域を対象に茅葺き

*1 三好市在住 *2 UN建築研究所 *3 空間計画研究所 *4 高田建築設計 *5 徳島県徳島土木事務所 *6 穴吹カレッジ
 *7 徳島大学大学院 *8 那須建築工房 *9 株林建築事務所 *10 榎メビウス *11 株大林組 *12 くすの木建築研究所

民家の悉皆的調査を行った。一次調査では、建物の配置や方位、規模、平面形式などの外観調査と、聞き取りにより建築年代や各部屋の呼び方などを確認し、調査票にまとめた。

その中で特に重要と思われる民家については、詳細調査をお願いし、協力を得られた8棟の民家について実測調査や棟札の調査、架構についての調査、それらの写真による記録などを行った。

5. 木屋平民家の概要

今回の調査で確認できた民家の位置図を図1に示し、それぞれの調査票の内容をまとめて表1に示した。主屋、隠居、その他の付属屋を含む、総数168棟の茅葺き民家を確認できた。以下調査内容に基づいて述べる。

1) 建物配置

屋敷地は急斜面を切り盛りし石垣（マエギシ・ウラギシと呼ぶ）を積んだ、等高線に沿った細長い形状が多くみられる。このような屋敷地は山間部民家の特徴であり、そこに主屋、納屋、隠居屋などの付属屋がほぼ一列に並ぶ（図2）（図3）。



図2 屋敷構え

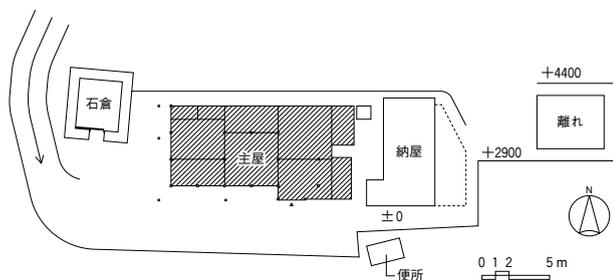


図3 配置図（麻衣の民家）

2) 屋根

屋根が茅葺きのままの民家は、三木家を含み10棟確認できたが、茅葺きの上にトタンを巻いたものが大半である。茅を降ろし、勾配の緩い切妻屋根に瓦

やトタンを葺く小屋下げした民家も6棟確認した。茅葺き屋根にトタンを巻いたり、小屋下げが行われたりしたのは昭和30～40年代であり、これ以降茅葺き民家が新築されることはなくなっているものと考えられる。なお、この時期は、茅場に杉が植林された時期とほぼ一致している。

また、茅葺き屋根に下屋を有する民家もみられるが、その多くは、葺き下ろしの茅葺き屋根を切り上げ、杉皮などで葺いた下屋を後から付けたものと考えられる。

川上や樺木では、共同の茅場があったそうであるが、二戸、麻衣、貢など個人で茅場を持っていたという話が聞かれた。また、川上では茅の葺き替えは40～50年ほどで行っていたそうである。

3) 建物規模

木屋平では建物の規模を示す言葉で「サブロク」という言葉があるが、上屋の大きさが梁間3間、桁行6間のことをいい、下屋部分を含む建物全体の大きさのことを示すものではない。これは旧美郷村の調査でも同様の意味で確認している。

調査結果からは梁間3間～3間半、桁行5間半～7間という規模の民家が多いことがわかる。本調査では下屋部分を含む全体の大きさを示しており、「サブロク」がこの地方の標準的な建物規模を示す言葉であると考えられよう。ただし、古い民家においては上屋梁の梁間を2間半としているものが多いようである。

4) 間取り

間取りは徳島の山間部民家の典型といわれる「中ネマ三間取」（図4）とオモテの前庭側に6帖もしくは4帖の間を持つ「喰違四間取」（図5）が多く、「横二間取」や「整形四間取」はそれぞれ7棟、2

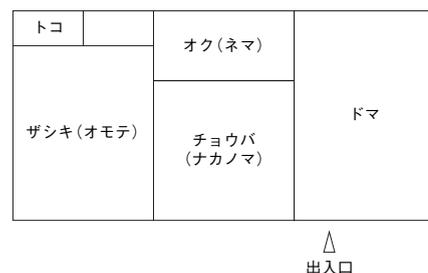


図4 「中ネマ三間取」

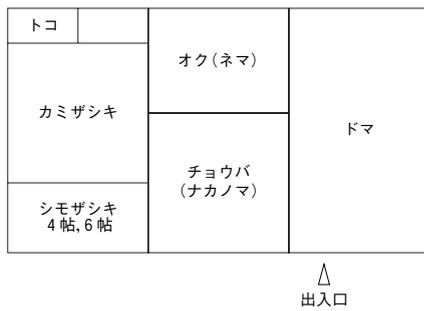


図5 「喰違四間取」

棟とかなり少ない。梁間・桁行共2間半の広いオモテを持つ民家は6棟確認できた。

「横二間取」や「中ネマ三間取」は、貞享元年(1684年)から昭和初期までみられたが、「喰違四間取」は19世紀以前に建築された民家にはみられなかった。そのため「喰違四間取」は19世紀以降の比較的新しい時代の間取りと考えられる。『阿波の民家』にもあるが、この「喰違四間取」は「中ネマ三間取」からの発展型と考えられ、後の改造により、「中ネマ三間取」が「喰違四間取」に変更された事例もみられた。また、この間取りは木沢、上那賀、山川などでも確認されている。

5) 勝手

集落により偏りがみられるが、全体では右勝手が45棟、左勝手が102棟と左勝手が多い。付属屋の位置や道(往還)の位置との関係なのか、もしくは風習によるものなのか、本調査では確認することはできなかった。

6) 年代指標

本調査では木屋平民家において有効と考えられるいくつかの年代指標が明らかになった。



図6 五尺間 (柱割)

(1) 喰違四間取

間取りの項で述べたように、古くは「横二間取」もしくは「中ネマ三間取」であったが19世紀になり「喰違四間取」が現れ、それ以降の民家にみられるようになったと考えられる。

(2) 五尺間 (柱割り)

五尺間とは梁間や桁行2間半を3等分した柱割りのことをいい、『阿波の民家』では東祖谷山、木屋平、半田、脇、上勝町などに分布するとされるが年代指標としては考察されていない。

本調査において五尺間を用いている民家(図6)を8棟確認できたが、桁行に用いられているものが1棟、梁間に用いられているものが7棟であった。隣の東祖谷山では桁行に用いられているものが多く木屋平との違いがみられる。

建築年代が確認できたもので最も古いものが貞享元年(1684)、最も新しいものが嘉永元年(1848)であった。そしてそのほとんどが古民家のひとつの指標とされるチョウナはつりの柱であった(図7)。また、地元大工からの聞き取りでは畳を用いていない時代の柱割りであるとのことであった。これらのことから木屋平において、五尺間を用いている民家は19世紀中頃以前の建築と推測できる。

(3) 構法

コッコミとは内法から上の柱断面をこき落とし、梁を貫いてさらに上部の梁を受けるコキ柱・オトシコミ構法のことを示す(図8, 9)。



図7 チョウナはつりの柱

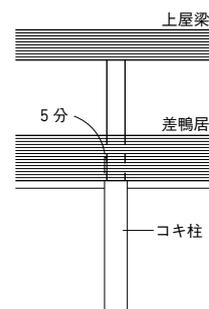


図8 コッコミの模式図



図9 コッコミ



図10 ドウシバリ

は祖谷地方，一字，木屋平において18世紀中頃以降にみられる構法とされる。本調査では，13棟においてこの構法を用いている民家を確認することができた。時代としては江戸後期から大正時代までの民家にみられた。また，架構を固める構法として，ナカノマ(チョウバ)の四方内法に差鴨居^{さしがもい}を回して架構を固める構法のことをドウシバリ(図10)といい，地元大工からの聞き取りやその間取りから比較的新しい時代の構法と考えられる。よって，木屋平民家においては架構を固める構法として古くはヌキダチ(ナゲシダテ)²⁾で18世紀中頃以降はコッコミやドウシバリといった構法も用いるようになったと考えられる。

7) 棟札について

今回の調査により確認できた棟札の建築年を古いものから順に以下に記す。

櫟木 no. 6	貞享元年 (1684) (図11)
谷口カゲ no. 4	享保18年 (1733)
櫟木 no. 4	宝暦6年 (1756)
森遠 no. 1	文政9年 (1827)
太合 ^{たいごう} no. 2	嘉永元年 (1848)
森遠 no. 2	明治15年 (1882)

最も古い櫟木の民家の棟札は，現在までの調査で確認され現存する民家の持つ棟札としては，木屋平の三木家住宅，佐那河内村の安芸家住宅に次いで県下で3番目に古いものと考えられる。また，棟札としては『阿波民家の棟札』(S49年度文化財調査報告書)によると，



図11 棟札(櫟木, 貞享元年)

13番目に古く，17世紀中頃の一般的な民家の資料として非常に貴重であるといえる。

なお，煤けていて判読不能な棟札については県立博物館に協力を依頼し，赤外線カメラにより判読を行い確認した。

8) その他

以下，木屋平民家において特徴的と思われることについて述べる。

(1) ひしゃぎ竹

外壁にひしゃぎ竹(図12)を使用している民家がみられた。ひしゃぎ竹とは，土壁が風雨により流れるのを防ぐ目的で施工されるもので，剣山地周辺で比較的多くみられる。近くに自生する真竹を火であぶり木槌でひしゃぎ，土が乾かないうちに張り付ける工法である。



図12 ひしゃぎ竹

(2) 前便所

剣山周辺地域にはオモテの前に便所を持つ民家があることが知られている。本調査においては残念ながら現存する前便所は1棟だけしか確認できなかったが，聞き取りによると古くはオモテの前に便所を持つ民家が多くあったそうである。

(3) 石倉

図13は麻衣の民家にある石積みの倉である。北西からの吹き返しの風(オトシカゼ)が強いため，強風時の避難場所としても利用できるよう，石造としたとのことである。聞き取りでは森遠にもう一つ石倉があるという。



図13 麻衣の石倉

表1 調査データ一覧

部落	番号	利用形態	建築時期 *1	屋根	下屋	方位	敷地形状 *2	間取	勝手	桁行	梁間	オモテ 開口	オモテ 奥行	下 手 表 上 屋 柱 数	コキ 柱	ネマ 入口	五尺 間	内法 寸法	備考
向標原	1	廃屋	-	トタン	四方	南	南西	-	左	7	3	-	-	-	-	-	-	-	
向標原	2	廃屋	-	トタン	葺下	南	南東	変形四間取	左	6.5	3.5	-	-	-	-	-	-	-	
向標原	3	空屋	昭和40年(1965)頃	茅	四方	南東	南東	-	右	6.5	3.5	-	-	-	-	-	-	-	上屋が高い
向標原	4	空屋	-	トタン	庇	南東	南東	-	左	6.5	3.5	-	-	-	-	-	-	-	
向標原	5	居住	-	トタン	葺下	南東	南東	-	右	8	3.5	-	-	-	-	-	-	-	
向標原	6	居住	江戸後期(嘉永年間)	スレート	四方	東	東	噴達四間取	左	6.5	3.5	-	-	-	-	-	-	1715	
向標原	7	空屋	-	トタン	葺下	南	南	-	左	7	2.5	-	-	-	-	-	-	-	
標原	1	居住	-	トタン	葺下	南	南	-	左	6.5	3.5	-	-	-	-	-	-	-	
標原	2	居住	明治初期	トタン	葺下	南	南	噴達四間取	左	6	3.5	-	-	-	-	-	-	-	S40頃トタン巻
標原	3	居住	天保年間	トタン	葺下	西	西	三間取	左	6.5	3	-	-	-	-	-	-	-	柱:栗(チョウナ)
標原	4	空屋	-	トタン	葺下	南	南	-	左	6.5	3.5	-	-	-	-	-	-	-	
標原	5	居住	文〇年間	トタン	四方	南	西	二間取	左	5.5	2.5	-	-	-	-	-	-	1690	S50トタン巻, 元葺下
標原	6	居住	大正初期	トタン	四方	南	西	二間取	右	5.5	3	-	-	-	-	-	-	-	S40小屋下
標原	7	居住	元禄年間	トタン	四方	西	西	噴達四間取	左	7	-	-	-	-	-	-	-	-	S40トタン巻
標原	8	居住	明治40年(1907)頃	トタン	四方	西	西	噴達四間取	左	6.5	3.5	-	-	-	-	-	-	1750	
標原	9	居住	-	トタン	四方	西	西	三間取	左	6	3	-	-	-	-	-	-	-	
標原	10	空屋	-	茅	二方	南	西	-	左	4	2.5	-	-	-	-	-	-	-	
標原	11	居住	昭和30年(1955)頃	トタン	四方	南	西	二間取	右	6	3	-	-	-	-	-	-	-	S50頃トタン巻
標原	12	空屋	-	トタン	葺下	南	北	-	左	4.5	3	-	-	-	-	-	-	-	
標原	13	倉庫	-	トタン	二方	南	北	元中ネマ三間取	左	8	4	-	-	-	-	-	無	-	切妻ヤマト
標原	14	居住	明治40年(1907)頃	スレート	四方	南	西	噴達四間取	右	7	3.5	-	-	-	-	-	-	1720	S40頃トタン巻
標原	15	納屋	-	トタン	四方	西	西	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14の納屋
標原	16	空屋	-	トタン	二方	南	西	-	左	5.5	2	-	-	-	-	-	-	-	
標原	17	空屋	-	トタン	二方	南	北	-	左	7	4	-	-	-	-	-	-	-	
標原	18	居住	元禄年間	トタン	不明	南	西	-	右	6	4	-	-	-	-	-	-	1730	
標原	19	居住	-	トタン	四方	北	北	噴達四間取	右	5.5	3	-	-	-	-	-	-	-	
標原上	1	空屋	明治30年(1897)頃	トタン	四方	西	西	噴達四間取	左	6	3.5	-	-	-	-	-	-	1730	S35頃茅葺替, 焼普請
標原上	2	居住	明治30年(1897)頃	トタン	葺下	南	南	噴達四間取	右	6.5	3.5	-	-	-	-	-	-	1730	S42茅葺替, S52トタン巻
桑柄	1	居住	-	トタン	四方	南	南	噴達四間取	左	5.5	3	-	-	-	-	-	-	-	
桑柄	2	居住	-	トタン	四方	西	北	-	左	5	2.5	-	-	-	-	-	-	-	S40トタン巻
桑柄	3	空屋	-	トタン	四方	南	南	-	左	6	3	-	-	-	-	-	-	-	S40頃トタン巻
市初	1	居住	-	トタン	葺下	南	南	噴達四間取	左	6	3.5	-	-	-	-	-	-	-	S40頃トタン巻
市初	2	空屋	-	トタン	三方	南	南	-	左	6.5	3	-	-	-	-	-	-	-	
市初	3	空屋	-	トタン	二方	南	南	-	左	5.5	3	-	-	-	-	-	-	-	
市初	4	空屋	昭和20年(1945)以降	トタン	-	南	南	-	左	6	3.5	-	-	-	-	-	-	-	
市初	5	居住	-	トタン	四方	南	南	-	左	5.5	3	-	-	-	-	-	-	-	
二戸	1	空屋	-	トタン	四方	南	南	-	左	6.25	3	-	-	-	-	-	-	-	
二戸	2	居住	明治年間頃	トタン	四方	南	南	噴達四間取	左	6	3.5	-	-	-	-	-	-	1730	サブロク, 茅場は個人所有, 隠居制有, 元庄屋
二戸	3	居住	江戸後期(嘉永年間)	トタン	葺下	南西	南西	中ネマ三間取	右	6	3	-	-	-	-	-	-	1740	H4頃にトタン, 茅場は個人所有
今丸	1	居住	昭和26年(1951)	瓦	四方	南	南	中ネマ三間取	左	4.5	3	-	-	-	-	-	-	1720	
今丸	2	空屋	-	スレート	四方	南	南	-	左	5.5	3	-	-	-	-	-	-	1740	
今丸	3	居住	-	トタン	四方	南	南	-	左	6	3	-	-	-	-	-	-	1730	
今丸	4	居住	-	トタン	四方	南	南	-	左	5.5	3	-	-	-	-	-	-	-	
今丸	5	居住	-	トタン	葺下	南西	南西	二間取	左	5	2.5	-	-	-	-	-	-	1720	
今丸	6	居住	昭和27年(1952)頃	トタン	四方	南	南	中ネマ三間取	右	6	3	-	-	-	-	-	-	1720	大黒柱有
今丸	7	納屋	-	トタン	葺下	南	南	-	左	4	2	-	-	-	-	-	-	-	6の納屋(元牛屋)
今丸	8	空屋	-	トタン	四方	南	南	-	左	5.5	3.5	-	-	-	-	-	-	-	
小日浦	1	居住	-	トタン	四方	北西	西	-	右	4	2.5	-	-	-	-	-	-	-	
小日浦	2	空屋	-	トタン	二方	北西	西	-	右	4	2.5	-	-	-	-	-	-	-	
ピヤガイチ	1	居住	大正初期	トタン	葺下	南	南	噴達四間取	右	6.5	3	2	2	-	?	引違	無	1730	ノキハリ
三ツ木	1	空屋	-	トタン	四方	南	南	-	左	5.5	3	-	-	-	-	-	-	-	
三ツ木	2	居住	-	トタン	四方	東	東	噴達四間取	右	6	3.5	2	2	-	-	-	-	-	S30トタン巻
三ツ木	3	居住	-	トタン	四方	南	南	噴達四間取	左	6.5	3.5	-	-	-	-	-	-	1750	ドウシバリ
三ツ木	4	空屋	-	トタン	不明	東	東	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
三ツ木	5	空屋	-	トタン	葺下	南	南	-	左	5.5	2.5	-	-	-	-	-	-	-	
三ツ木	6	空屋	-	トタン	葺下	南	南	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
三ツ木	7	空屋	-	トタン	四方	南	南	-	左	5	2.5	-	-	-	-	-	-	-	
三ツ木	8	居住	17世紀中頃	茅	四方	南	南	六間取	左	10.5	4.5	2	2	-	無	引違	無	1735	国指定重要文化財, 『阿波の民家』掲載
三ツ木	9	資料館	-	トタン	四方	南	平地	-	左	5	3	-	-	-	-	-	-	-	
貢	1	居住	明治20年(1887)頃	トタン	葺下	東	東	噴達四間取	右	6.5	4	2	2	3	有	引違	無	1725	ノキハリ, ドウシバリ, S50トタン巻, 納屋もコッコミ
南張	1	空屋	-	トタン	四方	南西	南西	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
南張	2	空屋	-	トタン	四方	南西	南西	-	左	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
南張	3	居住	-	トタン	四方	南	南	-	右	7	3.5	-	-	-	-	-	-	1750	
南張	4	居住	-	トタン	四方	南	南	-	左	6	3	-	-	-	-	-	-	-	
南張	5	空屋	-	トタン	四方	西	西	-	左	5.5	3	-	-	-	-	-	-	-	敷地内に小さなお堂有
南張	6	空屋	-	トタン	四方	南	南	-	左	5.5	-	-	-	-	-	-	-	-	
南張	7	空屋	-	トタン	葺下	南	南	-	左	6.5	4	-	-	-	-	-	-	-	ノキハリ
南張	8	空屋	-	トタン	葺下	南	南	-	-	5	2	-	-	-	-	-	-	-	7の離れ
南張	9	空屋	-	トタン	葺下	南	南	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
南張	10	居住	昭和10年(1935)頃	トタン	四方	南	南	-	左	6	3	-	-	-	-	-	-	-	土間の大釜でカジを焚く
南張	11	空屋	-	トタン	四方	南	南	-	左	6	3	-	-	-	-	-	-	-	
南張	12	空屋	-	トタン	葺下	南	南	-	左	6	3	-	-	-	-	-	-	-	
南張	13	空屋	-	トタン	四方	南	南	-	左	6	3	-	-	-	-	-	-	-	
南張	14	空屋	-	トタン	前葺下	南	南	-	左	6.5	4	-	-	-	-	-	-	-	
大北	1	居住	-	トタン	四方	南	南西	-	右	5.5	2.5	-	-	-	-	-	-	-	
大北	2	居住	江戸後期(嘉永年間)	トタン	四方	南	南	噴達四間取	左	8.5	3.5	-	-	-	-	-	-	1740	柱(チョウナ)
大北	3	空屋	-	トタン	四方	南	南	-	左	6	3.5	-	-	-	-	-	-	1760	
大北	4	居住	-	トタン	四方	南西	南西	中ネマ三間取	左	5.5	3	-	-	-	-	-	-	1730	大黒柱有
川井	1	居住	江戸後期(文化年間)	トタン	四方	西	西	中ネマ三間取	左	6	3	-	-	-	-	-	-	-	
川井	2	居住	江戸末~明治初期	トタン	四方	西	西	噴達四間取	左	7	4	-	-	-	-	-	-	1755	
川井	3	空屋	-	トタン	葺下	北東	北東	-	右	6.5	3	-	-	-	-	-	-	1760	屋根ムクリ有
川井	4	居住	-	トタン	四方	南西	南西	六間取	右	8	3.5	2	2	-	-	-	無	1760	ヒキモン, ハネダシ, つなぎチョウナ梁差口跡
川井	5	納屋	-	トタン	葺下	南西	南西	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4の納屋
川井	6	居住	-	トタン	四方	南	平地	噴達四間取	右	6.5	3.5	-	-	-	-	-	-	-	玄間構え

*1 表記なきは家人への間取による。 *2 表記なきは傾斜地, 斜面方位

6. 詳細調査民家の概要

1) 櫓木 no. 6

当家は貢の三木家より極楽寺に至る往還の直下、少し緩やかになった南東斜面に展開する櫓木集落の最上部に位置し、屋敷の西方には薬師堂がある。屋敷を「カミ」と称し櫓木の開祖と伝わる旧家である。棟札に貞享元甲子年（1684）□月二日の年紀がある。建築当初の柱と思われる地母のチョウナはつり150mm角の上屋柱が、おもてうらに概ね一間毎に建つ。未確認のおもて妻を除く梁間間仕切りには五尺間に上屋柱が建ち、これにへや毎に架かる二間物の桁行梁を柄差鼻栓締めで固めている（図14）。間取りは当初、往還への接道に近い西側をオモテとする「横二間取」もしくはこれに類する右勝手で、後年オモテ西にカマヤを増築し、オモテとナカノマを取り替え左勝手となる（図15、16）。更に昭和35年に小屋下げし、当初の上屋梁間2間半桁行4間の上に二階を増築、瓦葺きとした（図17）。改造が多いため不明な点も多いが、ヌキダチで古い建築要素が随所に見られる。



図17 建物外観

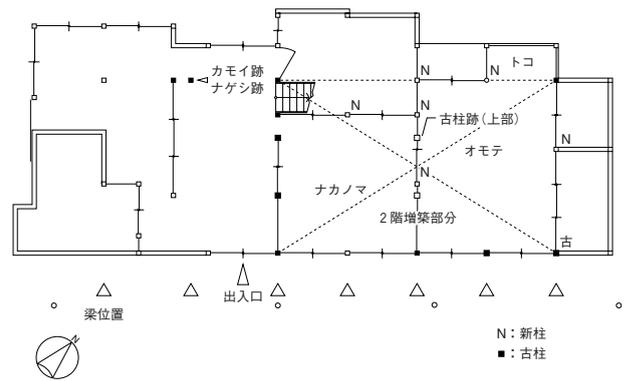


図15 平面図

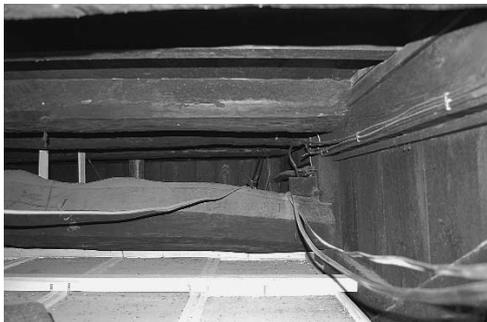


図14 仕口詳細

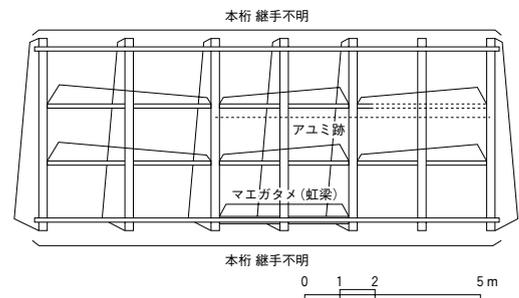


図16 上屋梁伏図

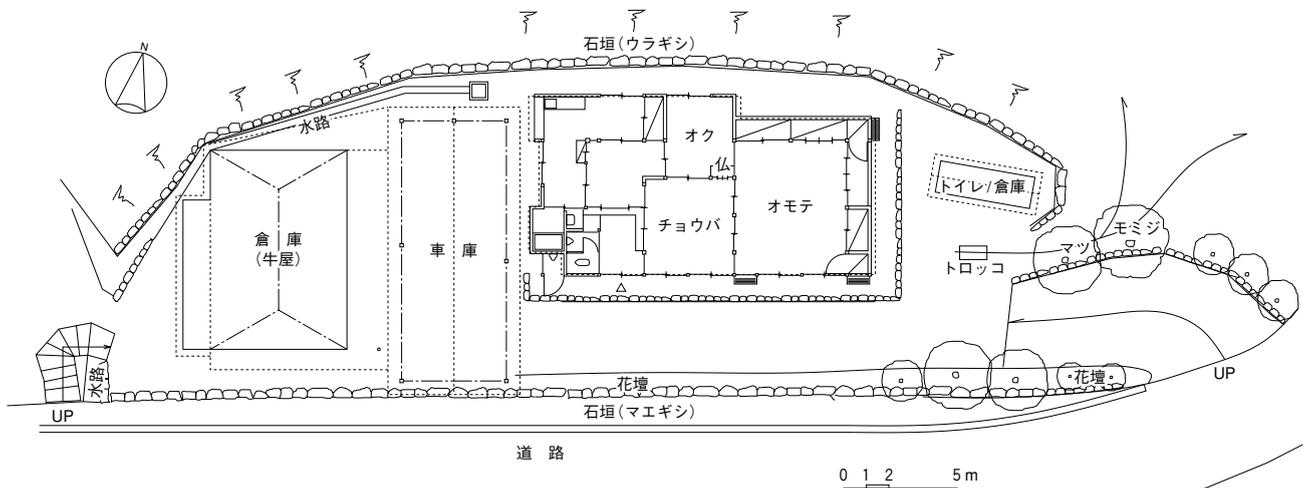


図18 配置・平面図

2) 櫓木 no. 4

大きなモミジを見ながら車道より斜路を上がると、東から便所、主屋、車庫、倉庫（元々茅葺き牛屋、櫓木 no. 5）と並ぶ。急な南斜面に石垣を積んだ細長い敷地で、背後に柚子畑が広がる（図18）。以前は西の石段を上がり門屋のような牛屋を通り抜け、屋敷に入ったという。主屋の規模は梁間3間半、桁行6間半で、間取りは「中ネマ三間取」の左勝手、梁間の五尺間である。

建築年は棟札により宝暦6年（1756）であることが確認できた。元々葺き下ろしで、屋根の軒先を切り上げて四方に杉皮葺きの下屋を回し、現在は上下ともトタンを葺いている（図19）。入口脇の風呂、便所などの土間廻りやオモテ妻の物入なども後の改造である。

架構はヌキダチで固められている。建築当初のものと思われる柱には栗と榎が使われており135～150mm角のチョウナ仕上げである。

3) 谷口カケ no. 4

当家は弓道谷の南東斜面にあり、屋敷地の東から



図19 建物外観

牛屋・主屋・離れとほぼ横一列に配されている（図20, 21）。現在は空き家となっているが建築年は棟札により享保18年（1733）と確認できた。主屋の規模は桁行6間、梁間3間で間取りは中ネマ三間取りの左勝手である。屋根は小屋下げされ、現在は切妻屋根のトタン葺きである。元々の柱は140～150mm角ほどでチョウナで仕上げられており、ほぼ1間毎に立つ。土台は無く石端建てで、壁は土壁で内外とも真壁で納められている。

小屋下げにより、小屋組は改造されているが上屋梁はそのまま残されており当時の架構の様子を知ることができる（図22）。



図20 建物外観

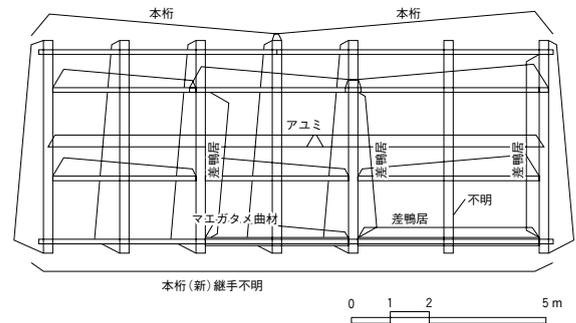


図22 上屋梁伏図

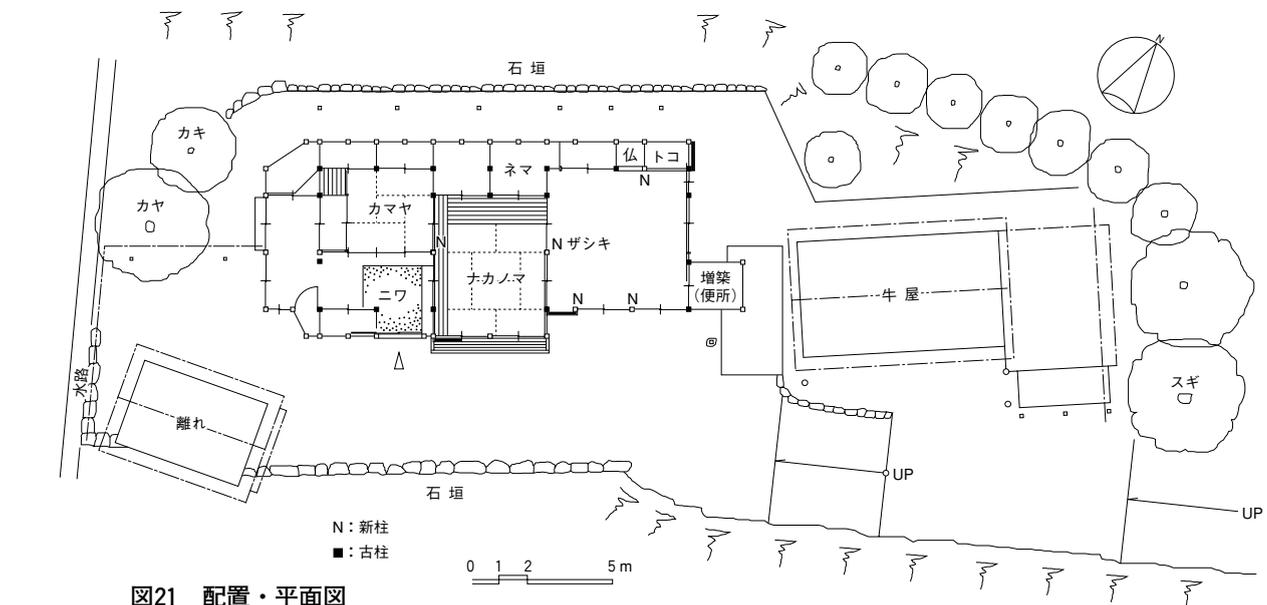


図21 配置・平面図

4) 檜原 no.13

檜原集落の東北に位置し、屋敷地の南側が道路に面する。主屋は間口8間奥行4間、土間部分間口3間、間取りは「変則的な四間取り」(図23)。主屋の東に新しい住宅が建てられ、普段はそちらで居住する。棟札はなく、ヒアリングからも建設年代は特定できなかった。長い間、倉庫として使われており、柱は長押の位置で折れ、傾いている。茅葺きの屋根(現在はトタン巻き)の下に、勾配のついたヤマト天井が組まれているのが特徴的である(図24)。また、オモテの前には、2間の連子格子がつく。



図23 建物外観

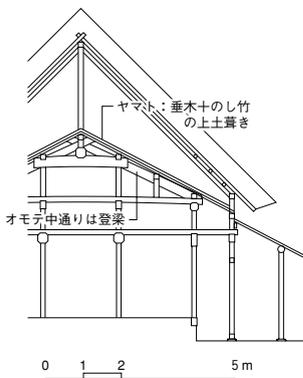


図24 断面図

5) ビヤガイチ no. 1

南北に流れる穴吹川の西岸、少し緩やかな南東斜面に位置する。東から、便所・牛舎・主屋・隠居と横一列に並ぶ(図25, 26)。聞き取りによると主屋は大正初期に建てられたという。建物規模は桁行6間半、梁間3間半で、間取りはカミ・シモザシキを持つ「喰違四間取」の右勝手である。屋根は茅葺きの上にトタンを葺き下屋はなく葺き降ろしで、軒裏には化粧に野地板と垂木を用いたノキハリがみられる。

ドマとチョウバの境は2間をとばして間に柱を立てず、ドマとオリマの境には大黒柱とムカイ大黒が立つ。また、架構を固める構法として、チョウバの四方内法に差鴨居を回して架構を固めるドウシバリが、柱と梁の接合部にはコッコミと呼ばれるコキ柱・オトシコミ構法もみられる。

間取りや大黒柱、ドウシバリ、コッコミ、ノキハリなど比較的新しい要素が多くみられる。



図25 建物外観

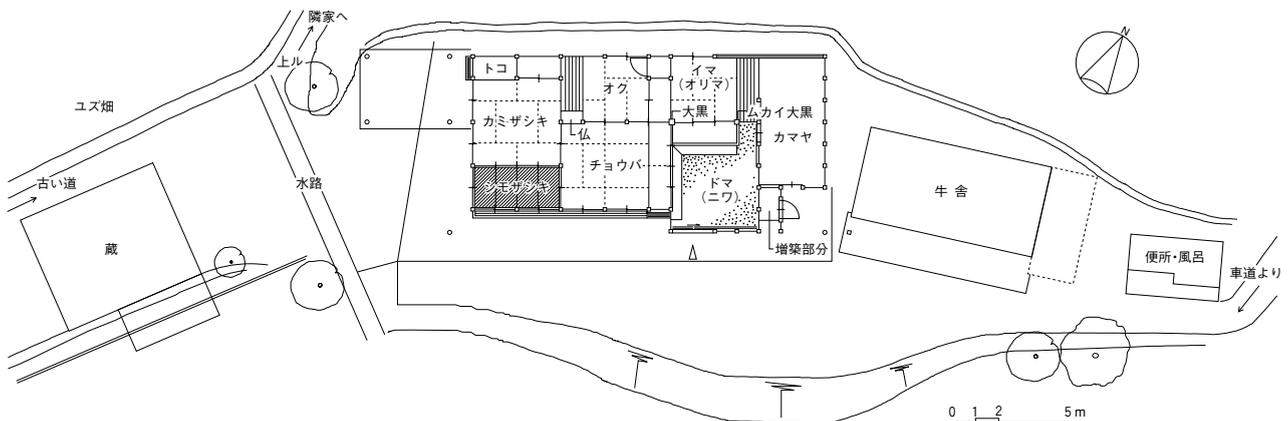


図26 配置・平面図

6) 森遠 no.1

当家は森遠の比較的緩やかな南斜面に位置する。主屋は梁間4間桁行9間と規模が大きく、間取りは「変形六間取」である(図27)。棟札による建築年は、文政9年(1827)である。元々茅葺きであったが、昭和30年頃小屋下げし、2階建金属板葺きに改造した(図28)。ゲンカンと廊下は2代前の当主の増築で、それまではオリマから出入りしていたという。高い位置に梁を二重に入れて桁行梁を挟む比較的新しい組み方で、各部屋に長押が廻り軸組を固めている。下手妻の上屋柱がニワに1本立ち、その奥に床を張っている。庇桁を受ける桔木は、ニワ・オリマ境、チャノマ・シモノマ境はマエゲタ筋の上屋柱に、オリマ・チャノマ境はそれより半間入った上屋柱に差し、外まで伸びる。

7) 森遠 no.2

当家は前述の森遠 no.1 の東側に隣接しており現

在は畳をあげて物置として使用している(図29)。元々タバコ農家であり、こんにゃく芋も同時に保存するためにナカノマの囲炉裏で採暖し、乾燥させていた。天井は土を置いたヤマト天井である。現当主は7代目で主屋は祖父の代に建てたもので、棟札による建築年は明治14年(1881)2月29日である。間取りは「中ネマ三間取」の左勝手である(図30)。柱は梅で内法の差鴨居をコキ柱で貫いた「コッコミ」の構法が用いられている。外壁は元々土壁であるが後に杉板を張っている。



図28 建物外観



図29 建物外観

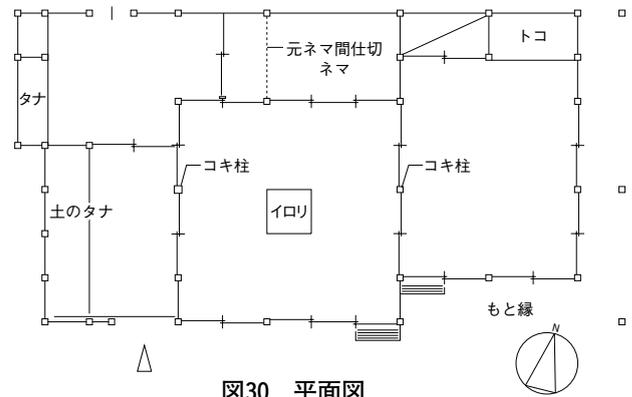


図30 平面図

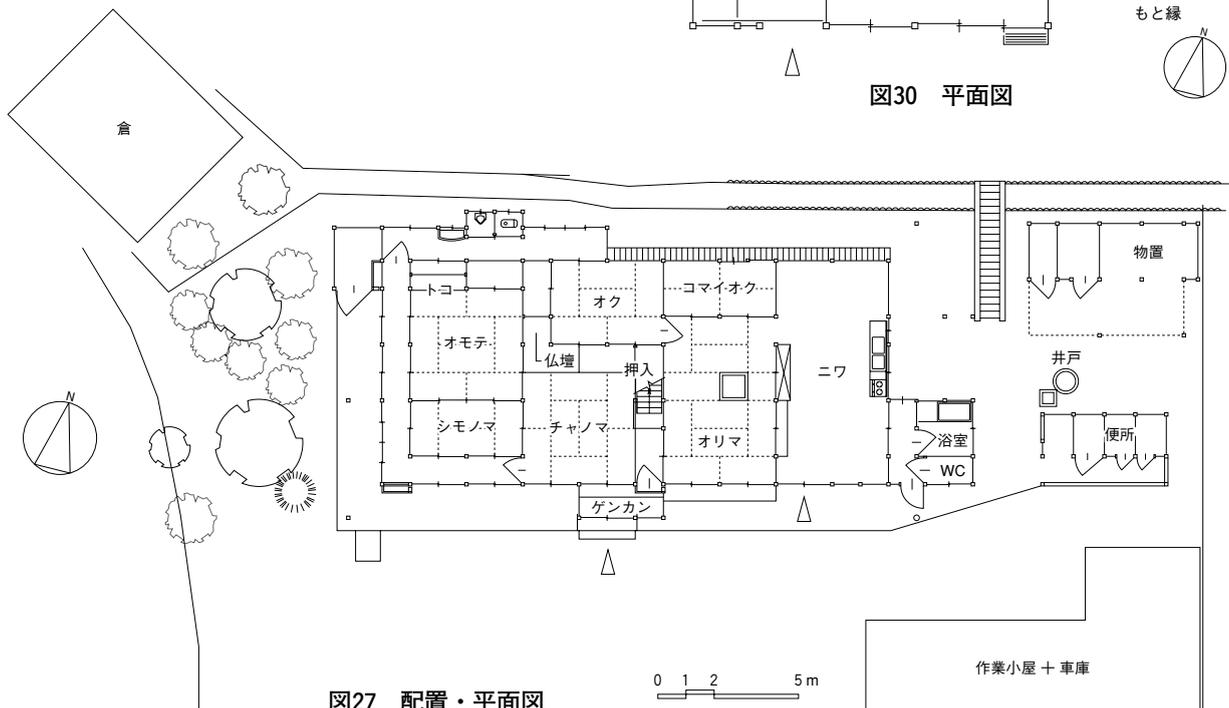


図27 配置・平面図

8) 太合 no. 4

当家は太合谷川沿いの南斜面に位置する。敷地内に主屋を新しく建て、もと主屋であった茅葺きの建物は、現在倉庫として使用されている。間口が1間半ほどあった土間部分が取壊されており、梁間3間半桁行4間半と規模は小さい。2帖のネマが2つ並ぶ「中ネマ三間取」である(図31)。梁間が五尺間で、上屋梁間2間半を3等分に桁行梁(この地域でヒキモンと呼ぶ)が2本架かる(図32, 33)。上手入側とネマ入口の柱位置は桁行梁とずれている。オモテとナカノマ前面の入側に内法高さでケヤキのマエガタメが入り、下屋部分を室内に取り込んでいる。2室とも天井を張っておらず、上屋の内法上は土壁・板張りもなく、貫が1段入る。軸組が長押と貫で固めるヌキダチであること、桁行梁の端部と柱の仕口が長柄鼻栓打ちであること、内法が1670と低いことなど古い要素が多い。棟札が見つからず建築年は不明であるが、以上のことから18世紀中期の建築であると推定される。



図33 梁組

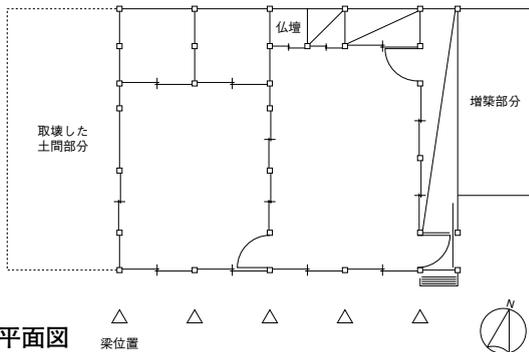


図31 平面図

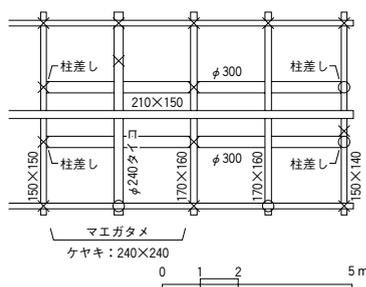


図32 上屋梁伏図

7. おわりに

昨年調査した三好市東祖谷山では民家の年代推定に対して、これまでの調査により明らかになってきた年代指標が有効であった。ひとえに諸先輩方の調査成果のおかげである。本調査においてもいくつかの建築年代を推定する指標を明らかにできた。本調査報告が後々の調査の一助となればと思う。

同じ剣山周辺地域として昨年調査した東祖谷山と同様の構法や間取りなどが多くみられた。間取りについては、東祖谷山では「中ネマ三間取」が時代を通じて一般的であるが、木屋平では19世紀の建物に「喰違四間取」も多くみられるようになる点が異なっている。

また、棟札を持つ民家としては県下で3番目に古い民家を調査・確認できたことは本調査の大きな成果であった。小屋下げされ、かなり改造されてはいるものの代々大切に使われ、その時代時代の生活の変化に柔軟に対応してきた結果であろう。重要文化財に指定されている三木家住宅なども同様であるが、このように改良されながら300年を越えて家族を守り育む『家』のあるべきひとつの姿がここにあるように思われる。大量生産大量消費の社会的風潮に限界が見え、環境問題が深刻となる一方のこれからの時代、このような民家調査や家づくりに携わるものの一人として重い課題を突きつけられているように思う。

最後になりましたが、調査に快くご協力いただいた地元木屋平のみなさま、並びに棟札の判読調査にご協力をいただいた徳島県立博物館主任学芸員の魚島氏に心より感謝の意を表します。

注釈

- 1) 屋根の茅を降ろすと同時にサス組も取り払い勾配の緩い和小屋などの小屋組を新たに組み屋根を改修することを小屋下げという。
- 2) 上屋梁を支える柱を内法上のところに付ける長押や貫で架構を固める構法で比較的古い時代の構法とされる。ナゲシタテともいう。

参考文献

- 木屋平村史編集委員会編(1996):『木屋平村史』。木屋平村
 奈良国立文化財研究所・徳島県教育委員会編(1976):『阿波の民家』。原田印刷出版株式会社
 徳島県教育委員会編(1975):『阿波民家の棟札』S49年度文化財調査報告書。徳島県教育委員会